

2024年5月5日 No. 3718

先週の講壇から

” 試みの世にあれど ”

ヤコブの手紙 第1章 12節～18節

聖句「神は、悪の誘惑を受けるような方ではなく、また、御自分でも人を誘惑したりなさらないからです。」(1:13)

1. 《我々は何者なのか?》 「出エジプト記」16章では、荒れ野を行く中、食糧が尽き、民がモーセに不平不満を投げ付けます。結局、神は民にウズラの群れやマナを与えて養われるのです。この挿話の中で、民の不平に対して、モーセは「我々は何者なのか?」という言葉を二度投げ返しています。「我々の後ろには、主が居られるのだぞ」という恫喝とも、モーセ自身の嘆きとも読むことが出来ます。いずれにせよ「我々は何者か」の自問自答は、人生の旅路そのものです。
2. 《創造者への問いかけ》 常日頃の暮らしの中では、改めて「我々は何者か」等と問い直すことはありません。これは究極の問いかけだからです。それでも、この問いかけが漏れる瞬間があります。苦しい時、困難に直面した時です。余命半年の癌告知を受けた私の友人（故人）は、この問いかけと共に、最期の日々を過ごしました。「あと半年しか生きられない、私は何者か?」「もうすぐ死んで逝く、私は何者か?」「何のために生まれ、何のために生き、何のために死んで逝くのか?」。フランスの哲学者、シモーヌ・ヴェイユは「不幸に驚く者は、創造それ自体に驚くのだ」と言っていました。不幸に晒された人は「なぜ神はこんな不幸を許すのか?」と問い、それ即ち「なぜ神は私を創造したのか?」の問いに繋がるのです。
3. 《強いられた人生》 「出エジプト」の民は「我々は何者なのか?」と問いました。42歳で末期癌の宣告を受けた友人も「私は何者か?」の問いかけが頭から離れませんでした。私たちは試練の中で初めて、自らの存在や人生の意味を問いかけるのです。抜き差しならぬ状態に追い込まれないと、神と向き合うことをしないのです。聖書では「試練」と「誘惑」は同じ「ペイラスモス」という語です。神は私たちを「誘惑」為さったりしませんが、神の「試練」を、私たちが「誘惑」（悪の入り口）にしてしまうのです。ヘブライ語の「誘惑する」は「強いる」です。私たちの生き死にも思うようにはなりません。人生は思うに任せないもの、確かに「強いられた」ものなのです。けれども、神さまが「与えられる恵み」も備えられているのです。「強いられた恵み」というものもあるのです。

朝日研一朗牧師